

鬼と仏と

住友を破壊した男・伊庭貞剛

江上 剛

最終回

第十一章 四阪島移転。そして引退

1

——大仕事にとりかかるか。

貞剛は、ていこう塩野門之助の提案を聞きながら、しおのものすけ己おのれの覚悟を言い聞かせるように声なき声でつひ呟く。

机には、瀬戸内海に浮かぶ小さな島々の地図が広げられていた。
しむかじま「四阪島しかありません」

塩野が強く主張する。隣には共に地図を覗き込むように見ている
別子銅山副支配人の小池鶴蔵がいる。

貞剛は、別子銅山関連の精錬所から出る亜硫酸ガスによる煙害を
なんとしてでも食い止めねば、住友の未来はないと思っていた。

別子銅山に巣くっていた虫もようやく大人しくなり、坑夫と彼ら
を管理する住友の社員たちとの意思疎通にも齟齬そごがなくなつてき
た。

荒れ果てたはげ山となった別子の山々への植林も進んでいる。

いよいよ、始める時がきた。

貞剛は、煙害防止のためには精錬所の移転しかないと考えるよう
になつていた。

毎日、銅山に登り、事務所の窓越しに精錬所から上がる煙を見て
いた。あの煙をどこに持って行くか。悩みは、それ一点だった。そ
の時、遠くに瀬戸内海が見えた。

——海……？

精錬所を海に移転すればどうだろうか。煙は、海に吸い込まれて
しまうのではないか。突飛な考えのようだが、光り輝く波を見てい
ると、この考えは捨てがたいと思うようになった。

かねてから招聘ていへんしていた塩野が足尾銅山あしおから戻ってきてくれた。

広瀬幸平ひろせに反旗を翻ひるがえしたため、別子に近づくことすらできな
かったが、幸平の退任とともにようやく禁制が解けた。

足尾銅山では水害で家族を失う不幸にあつたようだが、八重やえとい

う世話好きな女性と一緒にだ。想像していた以上に明るく、貞剛は安心した。トレードマークのフロックコートに山高帽は健在だった。

貞剛は、別子の煙害の実情を塩野につぶさに語った。

足尾銅山で渡良瀬川流域での鉱毒被害の問題を経験してきた塩野にとって、煙害は非常に身近な問題として認識できた。

「煙害をなくし、地元と協調していかねば住友の未来はないと思っている。産業発展のために銅が必要だと言っても人々の生活を踏みにじって良いわけがない。住友と地元の人々が共存共栄してこそ未来があるのだ」

貞剛の言葉に塩野は感激した。

足尾銅山は、鉱毒被害を全て金銭で解決しようと無理をしているため、田中正造しょうぞうをリーダーとする反対派との間で激しい争いとなっているからだ。

「臨済りんざいの言葉に、仏に逢おうては仏を殺し、祖師に逢おうては祖師を殺し、という言葉がある。私はね、この言葉通りの覚悟なのだよ」

貞剛は穏やかに言う。

「と、おっしゃいますと?」

塩野は、理解ができず問い直す。

「住友という会社を殺してもいいと思っただよ。それくらい覚悟がなければ煙害は防げない。人々を害するというこ

とは国家を害しているということだ。国家を害するなら住友の存在は許されない」

貞剛は静かな口調だが、力を込めて言った。

塩野は、電撃に打たれたように感激した。

今日まで会ってきた事業家は利益優先の人たちがほとんどだった。国家のためといいながら、その実は自分のためだ。ところが貞剛は違う。自己を捨て、公のために住友を経営しようとしている。

——この人のために働きたい。

「士は、己を知る者の為に死す」と司馬遷しばせんの『史記』にあるが、塩野はそのような心境になった。

「絶対に煙害を防ぎましょう」

塩野は貞剛に誓った。経営者と技術者というより同志のような思いがした。

貞剛は、精錬所の移転先を探すように塩野に命じた。塩野は、小池と共に候補地探しを開始した。この動きは、一切、外部に漏れることがないよう秘密裏に行われた。もし外部に漏洩ろうえいすれば、どんな横槍が入るか分からない。

貞剛は、海を候補の一つと考えていたが、そのことは自分の心に仕舞いこんだ。先入観なく候補地を選定してほしいからだ。

そして塩野は四阪島を提案してきたのだ。期せずして、貞剛が考

えていた「海」だった。

2

四阪島は、新居浜沖北西二〇キロに位置する。美濃島、家ノ島、
ねずみしま みようじんしま かじしま
鼠島、明神島、梶島の五島からなるが、四阪島と称されている。

「水はありません」

塩野は明瞭めいりょうに言う。

「水がなければ暮らせんだろう」

貞剛が懸念を示す。

「大丈夫です。新居浜から運びます。設備の冷却は海水を使います。海水を使うと設備が傷むとの心配がありますが、実験の結果、問題がないと分かりました」

「水がないにもかかわらず四阪島に決めたのは、どのような理由か
らなんだね」

「まずですね、別子の高橋精錬所と新居浜せうじやまの惣開精錬所そうかいという二か所の精錬所を運営することは合理的ではありません。これを統合するととなると、相当な規模になりますので、それなりの場所が必要で
す」

「なるほどな。煙害の原因である陸の精錬所を全て移転させるのだ

な」

貞剛は、これは相当な冒険だと即座に悟った。

重役たちは間違いなく反対するだろう。そんな海上の孤島に精錬所を全て移せば、もしものことがあれば銅を製造できなくなるのではないかと。

「もし全ての精錬を新居浜に移せば、煙害の規模は、推定しますに現在の十九倍にも達します。このような事態を地元の方々が容認するはずがありません」

塩野は、煙害防止という貞剛の方針を忠実に順守し、移転候補地を探したのだ。

「そんな事態となれば反対運動はさらに大きくなるだろう」

「四阪島の利点は海上の孤島であることです。精錬所から排出された煙は陸に到達する前に海に落ち、亜硫酸ガスは海に吸収されます。陸に煙は届きません」

「それは間違いないか」

「十分に検討しました。精錬所からの煙を一か所に集めて、直径約一〇メートル、高さ約六五メートルの大煙突を作り、そこから煙を放出すれば、もう陸を汚すことはありません」

塩野の自信たっぷりな口調は貞剛を勇気づけた。

「さらに申し上げますと、四阪島は海運の便がよく原材料などの物

流面でも優れております。ここがアジアの一大精錬所になります。もし別子で銅の産出がなくなったとしても国内の別の銅山、あるいは海外の銅山から原材料を運び込むことができます。こんなことを言うと、広瀬様に怒鳴られますね」

塩野は、首をすくめて小さく笑いこぼした。

「大丈夫だよ。私は君の中央精錬所構想には賛成だからね」

貞剛は軽く頷き、微笑した。

「精錬の残滓ざんしである鍔からみも海に捨てることができます。四阪島の周囲は深い海ですから。働き手も新居浜などで集めることができます」

塩野は自分の説明に満足したのか、地図を軽く叩いた。ここで決まり、とでも言うのだろうか。

利点が多い。しかし、えてしてそういう時は、もしもの場合の失点も多くなる。これで本当に煙害の解決になるのだろうか。本当に海に亜硫酸ガスが溶け込み、陸には影響を与えなくなるのだろうか。

貞剛は、塩野を見つめた。

——仏と魔とは是れ染浄の二境なり

貞剛の脳裏に臨済の言葉が浮かぶ。仏も魔も心の悟りと迷いの両面であるとの意味だ。

迷っても意味がない。塩野を信じ、塩野に賭けるしか道はない。

それが自分の覚悟である。目の前の靄もやが消えていく気がした。

「四阪島の所有権はどうなっている」

貞剛は、意を決したようにさっぱりとした表情で聞いた。

「全て民間の保有です」

小池が答える。

「直ちに買収にかかってくれ。当面、極秘だ。名義は私にしておいた方がいいだろう。住友が表に出ない方がいい。何かと問題があるかもしれないから」

「分かりました」

小池は答えたものの浮かない表情だ。

「どうした？ 何か気にかかることがあるのか」

「いえ、もし四阪島を買収した後で不都合なことがありましたら、いかがいたしましたでしょうか？」

小池が、貞剛の反応を窺うような顔をしている。

「そんなことを心配しているのか。今回は私が個人として全て買収する。もし上手うまくいかなければ桃でも植える。桃の花の満開の下で宴うたげでも開ひらこうではないか」

貞剛は、豪気に笑った。

塩野も小池も、貞剛の言葉に安堵あんどしたように声を上げて笑った。

「これで農民を苦しめることもなくなりますぞ」

塩野が力強く言った。

塩野と小池の二人は、秘密裏に行動し、四阪島の買収を進めていく。最終的にその総額は九千三百円となった。

この金額を現在の価値に換算するのは簡単ではないが、明治二十年当時の米一〇キロが八十銭。現在の米一〇キロの価格が三千元から五千元とすると、約三千五百万円から約五千八百万円ほどになるだろう。

貞剛は、それを自分名義というから、とりあえず自分の懐から捻出したのだ。今回の移転プロジェクトに賭ける意気込みが知れようというものだ。

貞剛は、塩野と小池と別れて支配人宅に戻った。

四阪島へ精錬所を移転することを決断した興奮が、まだ体を火照らせていた。

新居浜の支配人宅に戻ると、お光みつと小吉こきちが迎えてくれた。今夜は小吉に勉強を教えがてら、一緒に夕食を食べようと約束していたのだ。

大阪に家族を残している貞剛にとって、お光や小吉と過ごすひとはなによりの癒いやすしとなる。

「おじさん、遅いよ。お腹、へっちゃった」

小吉が口を尖らせて文句を言う。

「悪い悪い。しかし、食事の前に風呂に入りたいな。お光さん、湯

は沸いているかね」

「はい、準備してあります」

「小吉、一緒に風呂に入ろうか」

貞剛は小吉の頭を撫でる。

「おじさんの背中を流してあげるよ」

小吉は湯屋の方へ駆けだす。

「支配人様、申し訳ございません。小吉は、風呂が大好きなのですが、山では子供は、いつでも風呂に入ることできません。水は貴重ですから」

別子銅山には歓喜坑かんきこうなどの坑道の出口に共同浴場が設けられている。坑夫や碎女かなめたちは、そこで一日の汗や汚れを落とし、湯に浸かり体の疲れを取る。しかし大人数で入る風呂では、小吉のような子供がゆつくりと湯に浸かっているわけにはいかない。

「いつでもこの新居浜の役宅の風呂に入りに来ればよい。遠慮は無用だ。ところで今日の夕食は何かな」

貞剛は、いかにも楽しみだという表情になる。お光の料理の腕はなかなかのものだ。

「今日は鯛めしを用意しています」

「おお、鯛めしか。これは楽しみだ。早く風呂に入ろぞ」

貞剛の気持ち弾む。

鯛めしは、新鮮な鯛の刺身を出汁と卵を溶いた中に浸け、それを温かいご飯にかけるものだ。

貞剛は、新居浜に来て初めて食べたが、その美味さに驚いた。料理法は、やや荒っぽい漁師メシなのだが、大阪や京にはない素朴さがなんとも言えない。

「おじさん、早く」

小吉が湯屋から声をかける。

「今、行くぞ」

貞剛は、嬉しさに体が浮くような快活な気分になる。大きな課題が一步前に進んだ喜びが、全身にみなぎっているのだろう。

3

貞剛は、天龍寺の方丈で峩山と会っていた。

目の前には曹源池庭園が広がっている。夢窓疎石の作で六百年近くも経ているのに、その素晴らしさは人々を魅了し続けている。

手前の白砂は日本の浜辺、その先の荒々しい岩組みは、中国の磯。荒れる海を越えて日本に渡ってきた数多の高僧たち、またその海を渡って中国で仏教の神髄を学んだ日本の学僧たちを象徴しているのかもしれない。池の背後には嵐山から亀山を望むことができる。

五月の爽やかな風に揺れる若葉の緑が池に映り込んでいる。

貞剛は、友純ともいとに別子の状況や四阪島への精錬所移転案などを報告に来た。

特に四阪島の件については貞剛が良かれと思う方法で進めるようにとの言葉をもらった。貞剛と友純は煙害問題に関しては同志のようなものだった。共に早期の解決を願っていた。四阪島の買収を進めている件は、当分の間、重役たちにも内密にすることで意見が一致した。どこからか情報が洩れば不測の事態を招きかねない。

報告が終わり、ふいに峩山に会いたいと思って京都の天龍寺に来たのである。

峩山は、貞剛を曹源池庭園が見える方丈の縁に案内し、一緒に座った。

「いい庭ですね」

貞剛は、庭を眺めながら言う。

「夢窓疎石師は、禅の心をこの庭にあらわしたと言われているが、禅などには本来、こんな立派な庭は不要だ。ただ座ればいいだけだ。

この庭も方便だな」

「多くの人を仏の世界に導く方便なのですか。和尚にかかったら、世の森羅万象しんらばんしやうは皆、方便となりますね」

「臨濟師は『四大色身しきしんは是れ無常なり』とおっしゃっている。全て

仮の存在なのです。そのことを徹底すれば悟りになる。実体のないものを求めれば迷いになるのです」

「仮の中であくせくしているわけですね」

貞剛は庭を見続け、峩山の言葉を噛みしめている。

「ただし心は万鏡に従って転ずとも申しましてな。森羅万象は万鏡に映り、変化する。時々心が絶対なのだ。今を絶対と定めれば、喜びもなく、また憂うれいもないとも申すのです。貞剛殿は今の、ただ今の役目を果たされればよいと思います。それが禅の心に通じております」

「よく分かりました」

貞剛は、今、多くの事業を一気に成し遂げようと考えていた。

それは一方で迷いでもあった。大恩ある宰平の事業を全て根本から見直すことになるからだ。

恩を仇あだで返すということになりはしないか。これは士さむらいとして教育を受けた貞剛にとって身を切るように辛いことだった。

峩山の話の話を聞いていると、迷いが少しずつ晴れていく気がする。

全ては仮の姿。鏡に映る森羅万象。その都度都度が絶対……。

要するに峩山は我欲を捨て、あるがまま、望むがままに進めと言ってくれている。

貞剛が心の支えとする五箇条の御誓文ごせいもんの中に、「旧来の陋習ろうじゆうを破

り、天地の公道に基づくべし」という一条がある。

住友の陋習を払わねば、新しい時代に生き残ってはいけない。陋習を払うことができるのは、中興の祖、宰平の甥である自分をおいて他にない。

他の人にこのような血を流す役目をやらせるわけにはいかない。

全ての非難は我が身、一身に受けるべきだ。

全ては仮の姿、無常なり……か。成果を上げようとか、評価を得ようとか、何かを求めてはいけない。実体のないものを求めて迷いの道に踏み入るだけだ。自分を無にして、判断していこう。

「和尚」

「なんででしょうか？」

「山を登るときと、下るときはどちらが大変でしょうか？」

貞剛は静かな口調で聞いた。

「さあての……。普通は、山を登る坂道が辛いだろうな。息が切れ、足が上がらなくなる。まだ頂上が見えない。しかし拙僧は下山の方が大変だと思う」

峩山は、半眼になり、庭を見るときも全く見ている。

「理由を教えてください」

貞剛も庭をぼんやりと眺める。肉体が溶け、庭と一体になつていく。

「登りで力を使い果たし、もはや下山する力が残っていない場合もある。また下山しようと思ったとき、えてして目の前に次の山頂が現れるものだ。次の山を克服してから下山すればいい、登れるのは今だ、そう思つてその山頂を目指す。切りがない。そのうちに疲れ切つて遭難してしまう。下山すると決めたら、無事に里に辿りつく^{たど}ことのみを考えねばならない。妙な欲を出せば、下山に失敗する。足が弱っているのに、焦つて早足になる。足元をしっかりと見ていないために木の根に足を取られ、大きく転倒してしまうこともある。かように考えると、無事に下りきるといふのは非常に困難なことだ」

「上手く下山しないといけませんね」

貞剛は庭から視線を転じ、峩山を見つめた。

「その通りだが、上手くやろうと思うことが我欲になる。何事も無常、仮の姿だ。それをわきまえれば、下山は楽しいだろう」

峩山は、貞剛の考えが手に取るように分かるようだ。

貞剛は、全てをやり切り、自分のけじめとしての下山を今の段階から考えているのだ。

「なんだか池の周囲の木々が先ほどより鮮やかに見え始めた気がします」

貞剛は心が晴れてくる気がした。

「心の万鏡がきれいに磨かれたのであろう」

峯山は屈託くつたくのない笑みを浮かべた。

4

明治二十八年（一八九五年）五月四日、五日と貞剛は住友尾道おのみち支店に重役を招集し、第一回の重役会を開いた。

これは住友にとっては画期的なことである。それまでも重任局で合議制で案件を処理してはいたものの、形式的であった。

宰平の力が大きすぎたからである。合議制とは形ばかりで宰平の独裁専横どくさいせんごうだった。

この重役会は、実質的な合議制に改めようとする貞剛の考えによるものだった。

五箇条の御誓文にいう「広く会議を興し、万機公論に決すべし」の実践だった。

合議制で何が決められる。しょうしんよくよく小心翼翼とした重役たちなど当てになるものか。貞剛、よく覚えておけよ。重役たちは、住友の命ともいふべき別子銅山を売ってしまおうとしたのだぞ。それを止めたのは、私の決断だ。

宰平の激しい叱責が聞こえてくるようだ。

決断すべきときには、責任ある者が無心になって決断しなければ

ならない。

しかしたった一人の独裁よりは、重役たちが責任を持って発言し、その上で決断する、この合議制の方が間違いを未然に防げるのではないだろうか。

また一人一人の重役が責任を持って住友について考えることで人材の育成にもなる。その中から真に住友を担う人材を見出せばよい。

「住友は、万機公論に決すべし。この方針で行く。独裁は許さない」
貞剛は、集めた重役たちに強く宣言した。

この日が、住友の経営近代化の第一歩となったと言っても過言ではないだろう。

集まったのは貞剛の他に田辺貞吉、田艇吉、谷勘次、豊島住作、はつとりけい服部褰ていきちの五名。小池鶴蔵は社用で欠席した。

宰平引退の後、総理人は決まっていなかったが、筆頭重役である貞剛が代理を務めていた。

議題は本店新築、海外貿易などいくつかあったが、最重要は住友銀行の創設だった。

貞剛は、重役たちの協議を経て住友銀行を創設したいと考えていた。

住友内部では、明治五年（一八七二年）の国立銀行条例発布の頃から、銀行業に参入するべきではないかという意見があった。

しかし幸平が大反対だったのである。

幸平は「銀行などは両替屋の変形変称」に過ぎないと言い、「このような業務を住友はやるべきではない。他にやるべき困難な事業がある。それを為す^なことで国家の利益を増進し、以って主家の名誉と信用を併せ得るべきである」と別子優先の方針を主張していた。

銅山という重工業優先であった幸平にとっては、金利で稼ぐ銀行という事業は虚業に近いという考えを持っていたのではないだろうか。そのため住友では銀行業への進出がタブーとなっていた。

貞剛は、幸平のこの方針にかねてより疑問を抱いていた。

多くの産業を育てる銀行業は国家の利益になるのではないか。それは住友の事業として取り組んでもいいのではないかというものだった。

この考えに呼応するかのように、明治二十八年（一八九五年）四月に本店商務課長・岡素男と尾道支店長・上村喜平が、それぞれ銀行創設の意見書を提出していた。

住友は全く金融業に無縁であったわけではない。倉庫で預かった米穀や公債、株式などを担保に融資をする並合業^{なみあい}を営み、貸出金残高は百万円近くとなっていたのだ。

これを現在価値に換算するのは難しいが、百億円に近いのではないだろうか。

後に金融王と言われる安田善次郎が、明治十三年（一八八〇年）に創業した安田銀行の明治二十八年における貸出金残高は三百四十七万一千円であるから、住友の並合業がかなりの規模であったと推定される。

ちなみに安田銀行は、明治二十八年において資本金百万円、預金四百三十四万三千円である。

岡や上村は、銀行業の重要性をかねてから研究していた。

彼らが銀行創設の意見書を提出したのは、宰平の引退だけが理由ではない。日清戦争が明治二十八年四月に日本の勝利で終わったのだが、この年の下期頃から猛烈な銀行設立ブームが起こったのである。その理由は、事業会社設立が大変な勢いで活発化したため、それを支える銀行が必要となったのだ。岡たちは、この時流から銀行の創設が急務であると判断した。住友が行っている並合業、現在で言えばノンバンクになるのだが、その限界を肌身に感じていたのだろう。

銀行に改組し、預金を集め、それを原資にして多くの貸出金需要に応えたいというのが、岡たちの願いだった。

岡は銀行を設立し、「一般商工業の発達を助成すること、もはや一日も猶予すべきに非ず」と主張する。

上村は、三井、三菱などの大富豪は、銀行を兼業して益々隆盛と

なり、住友のような単純なる質屋業（並合業）では到底太刀打ちできないと悲憤慷慨する。ひふんこうがいそして住友は進取の気性に富む事業家として尊敬されているにもかかわらず、銀行業に進出せず、手をこまねいているのは、忍び難いとまで言う。

議論は白熱した。特に金を預かるということに対する責任問題が議論された。

反対派は住友の名声を考えれば、預金者が殺到して預金が集まりすぎる、そうなると運用先に困り、無理な貸出を行い、不良債権を造ってしまい、損失を出すのではないかと言う。

それに対して賛成派は運用先に困ることはない、仮にそのような事態に陥った時は国債などで運用すればよい、預金を集めることこそ銀行の本来の姿であると反論した。

貞剛は、両者の意見をよく聞き、岡や上村の意見書を読み込んだうえで、銀行創設を決定する。

住友は既に並合業によって銀行業の下地ができていること、どの富豪も右手に事業を拡大すれば左手に銀行を置く、両輪の経営を行っていることなどが決議理由として挙げられた。

預金に関しても「あくまで手堅き方法を取れば、危険の憂いなくして、幾分か利益を増すべきこと」と結論付けている。

他人から金を預かり、利息や元金の不払いなどという不測の事態

を引き起こすことがないよう手堅い運営を行うことを求めている。

貞剛は、新規事業を興すに当たって次のような基本精神を重役たちに徹底した。

「住友の事業とは、どんな人でもできるといふような種類の事業であつてはなりません。住友の信望と、住友の大資本と、住友の人材を以って行わねば到底計画さえできないといふような事業こそ、住友はおのれの事業として、これに全力を尽くすべきなのです。それでこそ住友の存在が、国家的にも社会的にも大きな意義を持つのです。単に利益があがるからといつて他の真似をして同じような事業を計画したり、あるいは資本があるからといつて既成事業を圧倒したりするのは、いやしくも住友のなすべきことではありません。

そのようなことはいたずらに資本を重複固定させることになり、資本の効率を悪化させ、同時に我が国の産業の健全なる発展を阻害する点において社会的見地より、従つて住友存立の根本義より、断然、慎まなければなりません。

住友の事業は住友自身を利するとともに、国家を利し、社会を利する事業でなければなりません。この意味においてそれが将来有望であり、社会に貢献しうる事業ならば、住友は社会に代わつてこれの経営の任に当たるといふ凛乎たる大市民的^{リニック}精神を逸してはならないのであります。

さらにもし、その事業が本当に日本のためになる事業であって、しかも住友のみの資本を以ってしては到底成し遂げられないほどの大事業であるならば、住友はちっぽけな自尊心に囚われないでいつでも進んで住友自体を放下し、すなわち一切の執着を捨て、日本中の大資本家と合同し、敢然とこれを造り上げようという雄渾なる大気魄を絶えずしっかりと蓄えていなければならないのであります」
そして締めくくりとして、次のように述べた。

「現実を重んじるも現実に囚われず、常に理想を望んで現実に先んじること、ただ一歩なれの精神で事業に臨むのです」

この最後の言葉は、平易だが、含蓄がある。理想を掲げて、現実の少し先に行く事業に取り組めというのだ。目先の利益や他が行っているから新規参入するという浅薄な考えでの事業は、住友では許されないのだ。

貞剛が話し終えると期せずして重役の中から拍手が起きた。住友の中核をなす重役たちが、貞剛の精神を共有し、住友の未来に向かつて気持ちを一つにしたのである。

幸平という偉大な中興の祖が経営から退き、ややもすると経営が混乱、浮遊する可能性があった。そこに貞剛の言葉が、太い柱石となったのである。

住友は、この尾道会議において、これまでとは一線を画す新しい

住友に脱皮したのである。

この年、明治二十八年（一八九五年）七月二十六日に、住友吉左きちざ衛門友純えもんの名義で大蔵大臣あてに銀行設立願書を提出し、同年九月十八日付けで認可された。

住友銀行は、資本金百万円で開業したが、この資本金は家長友純の全額出資であり、個人銀行としての出発だった。これは住友の事業は全て家業として個人経営の形で行われているからである。

銀行支配人に本店支配人田辺、銀行創設の意見書を提出した岡は本店貸付課長に就任し、上村は尾道支店長に留任した。

日清戦争（一八九四年～一八九五年）の終盤にかけて日本国内では多くの銀行が設立され、その数は明治二十八年の一〇四三行から、明治三十六年（一九〇三年）には二三〇八行と、二倍以上に増大したのである。その内の一行として住友銀行は順調に発展していく。

貞剛は、銀行以外にも国家を利する事業を始める。住友金属、後の日本製鉄の前身となる住友伸銅所などである。

住友は、貞剛の下で事業の多角化を進め、近代企業グループとしても体制を整えていくのである。

貞剛は、新居浜の広瀬邸に来ていた。幸平に呼び出されたのである。

「ここからの眺めは最高だ。惣開精錬所から立ち昇る煙を見ていると、まだまだ血が躍おどるような活気が満ちてくる」

母屋おもやに建つ登楼「望遠楼」の北向きの窓からは惣開精錬所と新居浜港に出入りする船舶を眺めることができる。

室内をせわしなく歩き、時折、海の方角を指さす幸平を貞剛は見つめていた。

呼び出された理由は分かっている。精錬所を四阪島に移転するのを中止しろというのだ。

幸平は明らかに怒っていた。

「ワシはお前が、これほどの愚か者だとは思わなかった。四阪島へ全ての精錬所を移転するなど、愚策の極みだ。すぐに撤回しろ。それになぜワシに一言、事前に相談しないのだ。そうすればこんなバカなことは即刻、中止させたのに」

幸平の飛ばす唾つばが貞剛の顔にかかりそうになる。

「友純様に上申書を提出されたと伺っております」

貞剛は、静かな口調で言った。

「おお、上申いたしました。お前の口車に断じて乗ってはなりませんとな。住友が破壊されますと申し上げた」

幸平は明治二十九年（一八九六年）三月に、「別子鉱山工場、新居浜惣開移転の儀を聞き、驚愕の余り卑見を具陳す」という上申書を友純に提出したのである。

「精錬所の四阪島への移転については友純様の了承を得ております」「あの方は何も分かっておられない。ワシは、引退して二年も経とうかという身だ。経営に意見できる立場でないことは重々承知だ。しかしこの住友家の一大事を座視するわけにはいかない。知って言わざるは不忠。大いなる不忠だ。ワシは逆命利君を忠としておる。引退した身であるが、今回ばかりはまかりでなければならぬと思ったのだ。ワシは、住友家と共に成長してきた。ワシの血の全てが住友家、ワシ自身が住友家なのだ。その満腔の思いを吐露申し上げたのだ」

幸平は、総理人を明治二十七年十一月に引退し、自分の人生を振り返る『半世物語』を執筆、出版するなどしていたが、住友とは距離を置きながら暮らしていた。しかし、自分の境遇には極めて不満を抱いていた。

幸平は総理人として、家長を経営に関与させず実質的に住友を支配し、明治二十五年七月には民間人で初めて勲四等瑞宝章を受章するなど、権力の頂点に登り詰めつつあった。

否、権力の頂点に立っていたと言えるだろう。

誰も宰平に対して異論を差しはさむことはない。権力は自ら腐敗するとの言葉の通り、宰平におごりが見え始める。その時期を狙ったかのように、煙害問題、大島供清ともしよの宰平独裁糾弾問題など、住友の経営基盤を揺るがすような問題が次々に噴き出してくる。

その結果として、明治二十七年十一月に突如引退を迫られたのである。

それは勇退というものではなく、住友からの追放ともいえるものだった。少なくとも宰平は、そう思ったに違いない。まさに憤懣ふんまんを抱いたまま宰平は住友を去ったのである。

「煙害を解決するためにはこれしかないと考えています。煙害を収束させることは、住友存続にかかわる重大問題ですから」

「煙害の解決は、新居浜周辺の住民に損害賠償をすればいいんだ。これを移転で解決しようとするのは新居浜の住民への裏切りだ。徳義に反する行為だ」

宰平は激する。

「新居浜と住友の永続的關係を考えれば、賠償金という金ではなく根本的な解決策が必要なのです」

「とにかく賠償金で解決するのが一番だ。煙害で田畑が荒れようが、山の木々が枯れようが、全て賠償金で対処しろ。これまでも別子はそうやって問題を解決してきたではないか」

「このままでは別子は、足尾銅山の轍を踏むことになります。国家的な問題となる可能性が十分にあります」

貞剛は、冷静に話を進める。

「では四阪島がなぜ不適當なのか言って聞かせてやろう。まずは無人島に職員や労働者を移住させねばならないんだぞ。工場は勿論、港湾設備、社宅などを整備するのにいったいどれだけかかると思っているんだ。それに水がないというではないか。飲料水、工業用水をどうするつもりだ。波が荒れたら銅鉱石も水も食料も何もかも運搬できないのだぞ。移転したからといって煙害が確実になくなるとは限らん。恐らくワシの予想では被害を拡大するだけになるのではないかと思う。そんな不確実な事業に巨費を投ずるなど、愚の骨頂だ。その金を損害賠償に使えば、問題は一挙に解決する。こんな決定をするお前を見損なった。お前は住友を破壊するのか。私が、再興した、住友を、甥のお前が破壊するのか」

幸平は、目を吊り上げ、拳を振り上げ、全身で怒りを発散している。引退後、経営に全く参画できなかったことの鬱憤を晴らすかのようだ。

「確かに叔父さんから見れば破天荒な計画に見えるかもしれませんが、しかし現状のように高橋精錬所と惣開精錬所に分かれているのは、非効率極まりありません。今、住友には将来に向かつての投資がで

きるだけの余力があります。これは叔父さんの経営改革のお蔭です。感謝しております。煙害を解決し、効率的な精錬事業のためには両精錬所を統合した一大精錬所が必要なのです。その候補地は別子山中の高橋精錬所を拡張する案と四阪島であります。試算しましたのでご覧ください」

貞剛は、塩野が作成した四阪島と高橋精錬所の産銅コスト比較表を宰平に提示した。

「こんなもの！」

宰平は、まともに見ようとはしなかったが、構わずに貞剛は説明を続ける。

宰平の怒りは痛いほど貞剛の胸を衝く。手塩にかけた惣開精錬所を移転させようとしたり、宰平の念願であった製鉄事業も中止したり、その上、銀行まで設立するという、宰平の功績を全否定するようなことばかりを貞剛が行うからだ。

しかし貞剛にしてみれば宰平が独裁的権力を振るっていた時には不可能だったことを、遅ればせながら急いで実現することで、住友を永続させようと考えていた。

これが畢竟、宰平の功績を世に残すことになるかと信じているからだ。たとえ一時的に宰平に憎まれようとも、いずれ理解してくれる時が来るに違いない。これが貞剛の真意だったのである。

「見積もりによりますと、高橋精錬所を拡張する場合は、建築費など約七十一万五千円、営業経費約六十四万六千円必要です。しかし四阪島移転の場合は、建築費など約五十万三千円、営業経費約六十三万四千円となります。したがって六〇キロ当たりの産銅コストは高橋精錬所は九円二十三銭五厘、四阪島移転後は九円五銭三厘となります。四阪島移転の方が、わずか十八銭ではありますが、有利となります」

「たかが十八銭ごときで惣開も高橋も捨てるというのか！」

幸平は全く聞く耳を持たない。

「叔父さん、本当にこのままでいいのですか。時代は、変わってきています。住友の言う事なら誰もが黙って聞く時代ではないのです。人々の声に耳を傾け、それに真摯しんしに対応することが求められる時代となっているのです」

「時代が変わっただと？ ワシはいつでも自利利他、公私一如の住友の精神をもっておる」

「その公私一如の『公』は、住友ではございません。今は天下国家、国民であります」

貞剛は、明快に言った。

幸平の「自利利他、公私一如」は住友が高く掲げる企業倫理であるが、幸平の場合は、どうしても公は住友となる。それは仕方がな

い。住友に幼い頃から仕えてきたのだから。しかし戊辰戦争を戦い、絶えず国家、国民というものを考えてきた貞剛にとって「公」は住友ではなく国家、国民だった。それに奉仕しない企業は存在を許されないという考えだった。

「ワシも天下国家を考えておる」

憤慨して、宰平が鼻息を荒くする。

「それならばどれだけ新居浜周辺の住民が煙害で塗炭の苦しみに耐えているかお考えください。周辺の山々は焼鉱の燃料調達、煙害などによって無残なげ山になっています。住友に別子、新居浜の自然を破壊し、人々を苦しめる権利がありますか。自然は、天下のものです。国家のものです。住友の自由にできるものではありません。自然をないがしろにして、国家をないがしろにして、人々をないがしろにして、住友が繁栄することは許されません。人道に基づく経営、天下国家に恥じぬ経営をしてこそ住友の存続が許されるのです。人の道、天下国家の道に反する事業を住友が行うなら、必ずや住友は破壊され、破滅への道を歩むことでしょう。それを防ぐことが、私の使命です。なにとぞ、ご理解ください」

貞剛は畳に額を擦りつけるほど、深く頭を下げた。

宰平は、貞剛の必死の訴えを黙って聞いていた。

その表情は当初怒り、憤懣、苦渋に満ちていたが、徐々に平常心

へと変わっていった。

「貞剛、もうよい。頭を上げてくれ」

幸平の声が少し穏やかに変わっている。

貞剛は、ゆつくりと顔を上げる。幸平が、苦渋の中にも笑みを浮かべている。悲し気ではあるが、わずかではあるものの笑みが見えるのは見間違いない。

「いろいろと申し上げました失礼をお許しください。しかし、私は……」

貞剛は、言葉を続けようとした。

「もうよく」

幸平は貞剛に向けて手をかざした。

「やはりお前とワシには同じ血が流れている。お前が、ワシの叱責ていこに梃子ていこでも動かぬ姿を見ていると、ワシが重役たちに向かって別子のお山の売却はまかりならんと抗議したことを思い出す。もうよい。分かったとは言わんが好きにしろ。四阪島への移転に賛成ではないが、これ以上反対はせん。言うことは全て言った。腹の虫は収まらないが、今更ワシが何を言おうと詮せん無きことだと分かった」

「申し訳わけございません」

貞剛は再び頭を下げた。

「しかし、これだけは言っておく。これだけの決断をした以上、も

し上手く行かないというような場合の出処進退だけは覚悟しておけよ」

幸平は、貞剛に四阪島への移転事業の責任を明確にするよう、覚悟を迫った。

「承知しております」

貞剛は、きつぱりと言った。

同時に貞剛の目から涙が溢れ出た。泣くなどというのは男として情けないと思いつつも涙が止まらない。

貞剛は、幸平の背中を追ってきた。あらゆる面で世話になり、最高の経営者として尊敬し、その指導に従ってきた。

ところが運命は貞剛に、幸平に対して弓を引き、矢を放つことを強いた。なぜこのような役目を果たさねばならないのか。運命の神を呪いたくなった。

しかしやらざるを得ない。幸平との縁を切る覚悟でこの場に臨んだ。案の定、幸平は怒りに打ち震えた。しかしとにもかくにも理解を示してくれた。

安堵あんどした……。

同時に幸平に対する申し訳なさと、四阪島移転だけではなく、総理人辞任を迫り幸平を追い詰めた自分の非情さに対する許しがたい思いが、貞剛の感情を激しく揺さぶったのだ。

*

貞剛は、家長友純に四阪島移転について具体的な意見書を提出した。

四阪島に一大中央精錬所を造ることの数々の利点を挙げた。

煙害解決にはこの方法しかないこと、別子や惣開は大規模中央精錬所を建設するに相応ふさわしくないことを主張した。

これに加えて四阪島移転の利点をより強調した。

問題になっている亜硫酸ガスは、海上の孤島である四阪島からは陸地に到達せず、海水に溶け込むことで無害になる。

新居浜あたが廃れるということはない。なぜなら新居浜に運輸、購買、機械などの部署を残すので、四阪島精錬所が発展すれば、失業者が出ることはない。また新居浜周辺の住民を精錬所従業員として雇用するので彼らにも利点が大きい。その他、四阪島移転で煙害がなくなれば、住民の反対運動は沈静化するなどを移転に関する意見書に列記した。

貞剛は、友純に対して四阪島移転に関しては、異論や支障が出るのは承知の上であり、大きな利益の前には様々な害を忍ばざるを得

ないとし、「速やかに断行あらんことを渴望」すると上申した。

友純は、四阪島移転の上申書を明治二十九年九月に裁可した。漁業関係者との補償交渉も終え、工事は翌明治三十年二月に着手となった。完成までに紆余曲折があつたが、明治二十七年末に竣工し、翌明治三十八年一月一日に本格操業するに至った。

当初、移転に関わる建設費などは約五十万三千円だったが、完成時には約百七十三万円にまで膨らんでいた。

別子銅山の二年分の純利益に相当したということ^{かんが}を鑑みると、おそらく実感としては優に百億円を超えるだろう。

貞剛は四阪島への精錬所移転のほか、別子の山々への植林、第三通洞からの鉱毒水を別子銅山に流れる河川に放出しないようにする坑水路や、その鉱毒水をろ過、中和する設備建設などの環境対策に全力を傾けたのである。

貞剛は、住友の事業における投資金額の大半を別子銅山に関わる環境改善に振り向けたのだ。この時代にそんな経営者はいなかった。現在よりも過酷な資本主義がまかり通っており、どの経営者も国家、国民の利益よりも自分の利益を優先していたのである。

貞剛の耳に、住友を評価する声^が意外なところから聞こえてきた。

明治三十四年（一九〇一年）三月二十三日の第十五回帝国議会で

の田中正造の演説である。

「伊予の別子銅山と足尾銅山とは天地の差があるので、実になんとも譬え比べ合いのならぬほどの事情がある。伊予の国の別子銅山は第一鉱業主は住友である。それゆえ社会の事理人情を知っておる者で、己が金を儲けさえすればよいものだというような、そういう間違いの考えを持たない」

田中は、住友と足尾銅山を経営する古河財閥との経営姿勢の差を強調する。

「住友は山を以ってこれを子々孫々に伝えて、これを宝にしておくことをいうのである。足尾銅山の方はそんなもんじゃない。つまりどしどし山を掘れるだけ掘り、この真中の良いところだけを取って、前後を捨てて川へ抛りこむ、などと述べた。

経営の永続性を重視する住友を評価し、短期的な利益に目を奪われる古河財閥を批判する。

「住友は害の区域の少ないにもかかわらず、この精錬地を島の中に移して、まず近傍の漁業者に害の至らぬようにするために、海の中の十町ばかりも毒水を持ち出して、海の中に注ぐようにしている」

住友の四阪島への精錬所移転を評価する。

「もつとも伊予の別子銅山といえども、苦情を起こされて色々やられて有志が骨を折ったからそうだったのであるが、始まりは無経験ということがお互いにあるのが、人より悪いと言われて、その悪

いことの過ちを改めるのを知っておるのは住友である。住友は事理を知った人である世の中、人間の人間たる行いたることを知っておる者でございませうから、一方、人間として、人間の行を知らない者と較べてはいけない」

田中は、住友は人間であるが古河財閥は非人間的であると痛烈に批判する。そして、こう言ったのだ。

「決して伊予国の別子銅山の鉱業主と、古河市兵衛とは較べものになる人物ではない」

別子銅山の鉱業主とは、貞剛のことである。田中は、貞剛と古河市兵衛を比較し、断然、貞剛が優れていると言う。

田中と貞剛は、第一回衆議院議員選挙の当選同期である。

貞剛は住友家の事情で、早々に議員を辞任せざるを得なかったが、もし議員を続けていたら鉱毒問題を話し合い、解決に向けて協力できただろうにと惜しんでいた。

貞剛は、田中の国会演説に住友を評価する内容が大きく織り込まれたことを嬉しく思った。

第一回帝国議会の議場において、銅山経営者である貞剛に田中は話しかけてきた。本来なら対立する関係に当たるにもかかわらず、非常に親し気な態度だった。「金儲け主義に陥ってこの国の自然や農民を苦しめてはなりませんぞ」と田中は、率直に言った。

——田中さんに褒められてしまったが、住民を守り、自然を守るのは経営者として当然のことだ。

西川吉輔先生よしすけや江藤新平先生えとうしんぺいは、人々の法の下の平等を実現しようと思いを懸けられた。私は、あらゆるものは自然の前で平等だと考える。人も、人が造る組織も、自然に抗あがって存在することは許されない。従って人間が自然環境を破壊することは許されないことなのだ。もし人間が傲慢ごうまんになり自然を破壊すれば、必ずや自然から反撃されることだろう。

さらに貞剛は、考える。

——人間は、住友は、そして私は何を求めて事業を行っているのだろうか。

事業というものは不思議なものだ。発展しはじめると、さらに発展させたいと願うようになる。欲が出る。

そのうち事業が私たちを動かすようになり、私たちは気付かぬうちに事業拡大の奴隷となる。やがて事業の目的も何もかもが分からなくなる。

「諸法は空相にして、変ずれば即ち有、変ぜざれば即ち無。三界唯心さんがいゆいしん、万法唯識まんぼうゆいしきなり。所以ゆえに言う。夢幻空花むげんくうげ、何ぞ把握はそくを勞せん」と臨済は言う。

全ては空くう。自分たちは夢幻空花というべき空を捉えようと事業に

あくせくしているのではないだろうか。ならば全てを自然に返すのが私の役割ではないか……。

6

「おじさん、行ってしまおうのですか」

小吉が寂し気な顔をした。

「山でやるべきことはあらかたやり終えたのだよ。後は大阪に帰ってやり残したことをしなくてはならないんだ」

貞剛は、大きくなった小吉の頭を撫でた。

初めて会ったときは六歳。貞剛が、五年の歳月を別子で過ごすうちに当然ながら小吉も年を重ね、十一歳となった。学校では勉強に励み、優秀な生徒だと聞いている。

「おじさん、大きくなったら住友で仕事をしたいんです。いいですか？」

小吉が目を輝かす。

「ああ、いいとも。ぜひ小吉のような元気の良い男子を社員にしたい。そのためにはもっと勉強するんだぞ」

「はい。父に上級の学校に行かせてほしいと頼んでいます。別子にはないので新居浜の中学校へ進みたいと思っています」

「そりゃいい。それならいっそのこと大阪に來い。おじさんが面倒をみてやるから。お父さんに私から頼んでやろう」

「本当ですか」

小吉は勢い込んで身を乗り出す。

「約束だ」

貞剛は小指を突き立てた。

「ありがとうございます」

小吉がその小指に自分の小指を絡める。

「食事ができましたよ」

お光が声をかける。

「今日は、お光と小吉と一緒に私の送別の夕餉だ。いっばい食べよう」

貞剛は立ち上がると膳が並べられている座敷へと向かう。小吉は、貞剛が大阪に出てくるようにと約束してくれたことが嬉しくてたまらない様子で、その後についていく。

座敷には、お光が用意してくれた料理が並んでいる。

小ぶりではあるが、尾頭付きの鯛もある。

「お光も、よき伴侶が見つかってよかったな。私からの祝いだ」

貞剛は、胸元から祝儀袋を出した。中には、心ばかりの祝いが入っている。

お光は、それを推し戴いたくようにして受け取った。

「よろしいんですか」

お光が遠慮がちに聞く。

「本当に世話になった。お光の作る料理のお蔭で、風邪ひとつ引かなかった。お礼を言わねばならないのはこちらの方だ」

貞剛はお光を見つめた。

美しくなった。今は二十二歳となった。良き縁談があり、新居浜で新居を構えることになっている。伴侶は、住友に出入りしている衣料問屋の跡取りだ。社員や坑夫が着る制服などの衣服を納入する際に、お光を見初みそめたという。

「支配人様には私たち姉弟は良くして頂きました。心から感謝しております」

お光は深く頭を下げた。

小吉もそれに倣ならう。

顔を上げた時、お光の目には涙が光っていた。

「二人が私と仲良くしてくれたお蔭で村の人や山で働く人も心を通じ合わせることができるようになったのだよ。特に小吉と一緒にお山に登るたびに、多くの人と挨拶をかわせるようになっていったことは嬉しい限りだった。ささくれだった人の心に潤いが戻ってき
た気がした」

「おじさんは変な人だと思いました。毎日、毎日、山に登るだけですから。こんなことなら僕も支配人が務まると思ったくらいです」

小吉が笑顔で言う。

「こらっ、小吉。なんてことを言うの」

お光が焦って叱る。

「ははは、小吉の言う通りだ」

貞剛は、恥入るように頭をかいた。

「でも不思議なのは、おじさんがお山に登るたびにみんなが笑顔になっていくんです。それまで人を押しつけて歩いてきたような人が、ゆっくり歩くようになって……。道まで譲るようになったのです。

僕にも『支配人様はどんな方だね』と聞いてくる人が少しずつ増えていきました」

「なんて答えたんだね」

「優しい人ですと言いました」

小吉はべろっと舌を出した。

「本当か？」

貞剛はにやりとして小吉をからかうように聞いた。

「本当ですよ」

小吉が真面目な顔になった。

「それはありがとう。私がこの別子でやったことはお山に登ること

と木を植えることだけかな。さあ、料理が冷めないうちに頂こう」

貞剛は、料理に手を合わせた。お光も小吉も手を合わす。

「おじさんと木を植えたのは楽しかった。もっともっと植えたい」

小吉はご飯を口に含んだまま話す。

「小吉、行儀が悪いですよ」

「姉さんには叱られてばかりだ。旦那さんもきつと叱られるんだろ
うな」

「こら、小吉！」

お光が怒りながら、頬を赤らめる。

「次の支配人にも木を植えるようにと頼んでおいたから、小吉も手
伝ってくれ。百万本以上の木々を植える。小吉が大人になる頃には、
お山は素晴らしい緑の山になっているだろう」

貞剛の目の前に緑の木々が豊かに生長した別子の山々が広がった。
決して謙遜けんそんではなく、自分がやった事業で、後世に誇れるものがある
としたら植林だろうと思った。

後任の支配人には鈴木馬左也まさやを指名した。

鈴木は貞剛が内務省から引き抜いた人材である。文久元年ぶんきゅう（一八
六一年）生まれの三十八歳だ。

明治二十二年に行われた別子開鉱二百年祭の際、愛媛県書記官だ
った鈴木に出会った。

鈴木は宮崎県生まれで東京帝国大学を卒業、内務省に入省し、将来を嘱望しよくぼうされていたが、貞剛の誘いに応じて住友入りを決意した。見込み通りの人材だった。トップになる人間の資質には構想力と決断力が必要だが、鈴木はその両方を備えていた。

——私が風なぎの人間なら、幸平は嵐の人材だ。幸平の嵐が吹き荒れた後、私がそれを鎮め、なぎ倒された木々や稲を起こし、倒れた家々の再建に尽力した。私の後が同じ風の人材では企業は衰微する。

とかく経営者は自分の器より小さき者、自分に従順な者を後継者を選びがちだ。

蟹かには自分の甲羅に似せて穴を掘るといふ諺ことわざがある。あれは分相応という意味のようだが、後継者選びの失敗を言い得ている。自分と同等、あるいはそれ以下の者を後継者にはいけない。自分の穴より大きい穴を掘る者を選ぶべきだ。少なくとも自分と違う資質の後継者を選ばねばならない。その点、鈴木なら大丈夫だ。植林の意義を理解し、私の何倍もの規模で継続してくれるだろう。

明治二十九年（一八九六年）十月一日に貞剛は、住友家法を改正した。

改正の第一は、重任局を廃止し、重役会で重要事項を審議すること、第二は、総理人を総理事と改称すること、第三は、従来、支配人の下位にあった理事を重役として重役会の構成員とすることだっ

た。

幸平のような独裁者を生み出さないための改革だった。もし独裁的権限を振るうようなトップが現れても、その暴走を許さず、重役たちが彼の行動を責任をもって制御できる体制に変えた。

独裁は経営の意思決定の迅速化には最適である。しかし間違った道に進んだ場合、企業は滅びの道へまっしぐらに突き進んでしまう。重役による合議制は、意思決定に多少時間がかかるかもしれないが、トップの暴走を防ぎ、企業を正常な道に戻すことができる。貞剛は、第二の幸平を生み出さないような組織に改正したのである。

この改正は、貞剛自身が退任した後も住友の組織が正常に機能することを見据えてのことだ。貞剛の人生の下山に向けての措置だとも言えるだろう。

「おじさん、どうしたの？」

小吉が怪訝けげんそうに見つめている。

「ああ、明日、別子を去ると思うといろいろ思い出してな」

貞剛は、箸を置き、穏やかな表情で小吉を見つめた。

「先ほど、おじさんが言ったようにお山が緑でいっぱいになったら、また一緒にお山に登りたいな」

「必ず一緒に登ろう。なあ、小吉、昔の人の言葉に『山川草木悉皆さんぜんそうもくしつかい成仏じようぶつ』というのがある。その意味は、自然のあらゆるものに仏様が

宿っておられるということだ。住友は、仏様が宿っておられる山の木々や野の草花、田畑の稲や野菜などを精錬所の煙で台無しにしてしまったが、許してくれよ。おじさんの跡を継ぐ者が必ず元通りにしてみせるからな。お山に木がいっぱいになると、お山がお喜びになつて皆を守つてくださるのだ。大雨になつても木がしっかりと根付いてお山が崩れるのを防いでくれる。はげ山のままでと、お山は怒つて少しの雨でも崩れてしまうのだよ」

貞剛は、手を伸ばして小吉の頭を撫でた。

「木がいっぱいになるとお山がお喜びになるの？」小吉は好奇心を刺激されたのか、目を見開いて貞剛を見つめた。「お山は、今ではおじさんのこと怒つていないと思うよ。きつとね。だつて過ちあやまて、改めざる、これを過ちこやしという孔子様もおっしゃっているから。おじさんは過ちを認めて改めたんだから」

小吉は、明るい口調で言った。

貞剛は驚いた。まさか小吉から孔子の言葉で、教えられるとは思わなかった。

「小吉、偉いぞ」

貞剛は、心から愉快になり「ははは」と声に出して笑った。

明日、別子を去るのか……。笑いながらも一抹いちまつの寂しさを感じていた。

*

貞剛は、明治三十二年（一八九九年）一月、鈴木馬左也の着任を得て、大阪に帰任した。別子暮らしは五か年に及んだ。

新居浜の港は多くの見送りの人々で埋まった。勿論、小吉もお光もいる。小吉は、人目をはばからず大泣きに泣いた。

汽船が、港を離れる。貞剛はデッキから遠くなりつつある別子の山々を眺めていた。頂いただきには白い雪が積もっている。長く厳しい冬が始まっていた。

「五か年のあと見返れば雪の山……」

思わず口をついて句が飛び出した。やるべきことはやったということろよい満足感に満たされていく思いだ。

後日、この句を品川弥二郎しながわ やじろうに贈ると、早速「月と花とは人に譲りて」と返してきたのである。

貞剛が暮らした五年の別子は、冬の時代。雪月花で言えば、雪の時代だった。しかしそのことになんら拘泥こうでいすることなく月と花とを愛めでる良き時代は後任者にあっさり譲るといふ貞剛の潔さを品川は称賛したのだ。

しかし、厳しい冬の時代は、まだまだ終わっていないかった。

7

明治三十二年八月二十八日午前八時頃、過去に経験がないような暴風雨が愛媛県を襲った。

午前八時半頃、細かく霧のような雨が降り始めた。空は陰気な厚い黒雲に覆われ、朝の光はまったく地を照らしていない。夜が続いているかのように暗い。風が徐々に強くなる。その風が非常に冷たく、別子の山の人々の体も心も冷えさせるようだった。

「嵐になるのかな。風が冷たくて鬼の舌で舐められているように気持ちが悪いくらい」

「今年は大風が多いですな。早く仕事を終えて家にいた方がいい」
人々が囁ささいている。

小吉は、空を見上げた。真っ黒な雲に体ごと包まれてしまいそうで不安が募る。風の音が、徐々に大きくなる。雨は霧雨から、雨粒が顔に当たって痛いほどになってきた。風が強くなり、ウォンウォンと獣けもののような叫び声が聞こえてくる。

「姉ちゃん、大嵐になるよ」

家から出て来たお光に不安そうに呟いた。

お光は、新居浜の嫁ぎ先から骨休めに戻ってきていた。お腹には小さな命が宿っていた。

「嫌だわね。なんだか寒い」

お光は、風に当たると、寒そうに肩をすぼめ、体を震わせた。

小吉の家は、見花谷けんかだにの坑夫住宅の中の一軒だ。今日は、お光が久しぶりに顔を見せたので父は仕事を休み、家にいる。母は、朝食の後片付けをしている。

小吉は背後を振り返った。坑夫住宅が、銅山川に向かう谷あいの斜面に階段状に密集している。家と家の間には人一人が通れる幅の道があるだけで、軒のきを連ねるといふ表現がぴったりだ。本来なら谷あいを流れる水の道なのだが、そこを家が埋め尽くしている。別子の家は、全て谷を切り開いて造られており、戸数は七三〇戸以上だ。

そこに四千人近くが暮らしている。

「本当に木がないなあ」

小吉の足元に濁った水が流れ始めた。

——はげ山のままだと、お山は怒って少しの雨でも崩れてしまうのだよ……。

ふいに貞剛の言葉が小吉の頭をよぎった。

突然、雷らいが轟とどろいた。真っ暗な谷が雷光に照らされて不気味に青光りした。

——山が怒っている……。

小吉は、急いで家の中に入った。

午後八時過ぎ——。

風雨は猛烈に強くなった。家が飛ばされそうになり、がたがたときしみ始める。ひっきりなしに雷鳴がとどろく。その度に雷光が家の中に飛び込み、ランプに照らされて酒を飲む父の影を切り裂く。

「お父ちゃん……」

「どうした小吉」

「怖いよ」

「大丈夫だ。お山に働くものはこれくらい嵐ではびくともせん」
豪快に湯呑の酒を呷る。しかしその表情にはこわばりが見えた。

「あんた、どうなるかね」

母が、いざという時のために衣服や貴重品をまとめ始めている。

「なあに、すぐ止むさ」

父の言葉とは裏腹に風雨は強さを増し、一向に弱まる気配はない。

「よりによって、せっかくお暇を頂いて実家に帰ってきた時に」

お光が嘆く。

その時、小吉の耳にどっどつと地響きのような音が聞こえた気がした。それはまさしく山の怒りの声で、小吉は鼓動が一気に高まり、苦しくて胸を押さえた。

*

「なんだと！」

貞剛は、思わず叫んだ。

新居浜分店から別子銅山が土石流で崩壊し、大惨事になっているとの急報が大阪の住友本店に届いたのである。

八月三十日午前十時のことだ。

新居浜分店とは、電信電話は不通になっていたが、汽船で急報を運んできた。

八月二十八日の深夜、暴風雨の中を警備員の玉井と銀行の出張所員岩橋が牛車道を転げるようにして走り、銅山越を越え、必死の思いで新居浜分店に辿りつき、別子銅山の惨状を伝えた。

——二十八日の夜になり風雨はますます激しくなり、突如、山が崩れ、山津波が見花谷の坑夫住宅を押し流したのであります。雷鳴が轟き、風雨激しき中で、隣の人の声さえ聞こえぬ中にもかかわらず老若男女の悲鳴が聞こえるのです。雷光に照らされると、土砂に埋もれた家屋、人々が助けを求めて手を上げますが、そのまま銅山川に流されていくのです。母親が小児を背負い、体の前には乳飲み

子を抱えたまま、土砂に埋まっております。坑夫の胴体も土砂に埋まっておりますが、頭は木石が直撃し、無残にも潰されております。それらが雷光の青い光に照らされますと、もう地獄絵図であります。

玉井と岩橋の二人は、惨状を伝え終わると、気を失ってその場に倒れ込んだ。

「すぐに別子に向かうのだ」

貞剛は、たまたま大阪本店に来ていた別子支配人・鈴木馬左也に指示した。

貞剛と鈴木は手分けし、陸軍と大阪の医学校に救護隊派遣を要請した。八月三十日午後十時二十分、臨時編成した二十九名の救護隊員とともに二人は汽船に乗り込み、新居浜へと向かった。

瀬戸内海はまだ風雨が強く、汽船は大きく揺れた。貞剛は雨に打たれながらも甲板に立ち、別子の方向を睨んでいた。暗闇で何も見えないのだが、貞剛の心を占めていたのは、小吉たち別子の人々の安否だった。

「小吉、みんな、無事でいるんだぞ！」

貞剛は、暗闇に向かって声を振り絞って叫んだ。

新居浜分店に入った貞剛は、状況の報告を受け、鈴木を鉾山に向かわせた。貞剛は、新居浜分店で救援活動の全体を指揮した。

被災者の救護、死者の捜索、負傷者の手当て、食糧といった救援

物資の手当てなど、部下を励まし、不眠不休で働いた。

地元紙海南新聞は、九月一日付けで住友が別子の被災者救済のために汽船木津川丸を使い、四阪島で精錬所や社宅建設に当たっていた人夫を数百名別子に派遣したと報じている。

貞剛は、四阪島精錬所移転工事に携わっていた約千数百名の人夫の大半を別子の道路、鉄道の復旧に当たらせたのである。

新居浜分店に寄せられる情報は悲惨で、耳を塞ぎふさぎたくなるものばかりだった。

暴風雨の中、必死で高台に逃げ、助かった坑夫が報告する。

「夜が明けて、自分が住んでいた見花谷の坑夫住宅は土石流で跡形もない。五十余りあった住宅はわずか四戸を残すのみ。流れの坑夫、稼しぎ人も多く住んでいた住宅も、完全に土砂に埋まっている。死屍しし累々るいというのはこのことを言うのだと思った。土砂からは血の気を失った手や足が突き出ている。ある者は手足がちぎれ、頭は砕け、妊婦の腹は裂け、胎児が飛び出している。地獄もかくやという惨状である。一体どれだけの人が亡くなったのか。助かった者は、土砂に埋まる人を自らの手で掘り出す。爪は割れ、手は血だらけだ。家族の名前を呼び、徘徊はいかいする者、呆然とまるで阿呆のようにその場にうづくまる者。まだ雨は降っていたが、雨音に混じって土砂に埋まった人々の苦悶くもんの声が聞こえ、震えが止まらない……」

貞剛は、救援や復旧に当たる者を督励とくれいしつつも、小吉と、その家族のことが頭から離れない。しかし個人的な感情で動くわけにはいかないと自制していた。

せめてもと山に登る部下に、小吉や家族のことで情報があれば知らせてくれるように頼んでいた。

九月三日午後、家長友純が別子に到着した。

「被害はどうですか」

友純は貞剛に聞いた。

「昨日までに死者は二百四十二名、行方不明者二百七十余名であります」

貞剛の表情は苦渋に満ちていた。

「そうですか……」

友純は言葉を失い、呆然とした。

翌四日の早朝、友純は部下を伴って、まだ復旧が十分でない山道を歩き、別子の山に登り、被災地を見舞った。

「伊庭様、伊庭様」

部下が喘ぎながら駆け寄ってきた。また緊急事態かと貞剛は身構えた。

「どうした？」

貞剛は椅子から飛び跳ねるように立ち上がった。

「住友病院に小吉という少年が収容されておりまして、伊庭様に家族はみんな無事だと伝えてほしいと申しております」

部下が報告した。

貞剛はその場に崩れ落ちそうになり、椅子を掴んでようやく耐えた。全身が震えだす。喜びのためだ。自然と涙が溢れ、表情が緩む。

部下が怪訝な顔をして見ている。

「そうか、そうか」

貞剛は独り言のように繰り返した。

「その子におじさんはここにいろぞと伝えてくれ。すぐに見舞いに行くともな」

貞剛は流れる涙を拭いもせずと言った。

「承知いたしました」

部下は、貞剛の言葉を伝えるために山に戻った。

*

貞剛は、救援の指揮を部下に任せ、住友病院に向かった。

病院には多くの負傷者が収容されていた。貞剛が姿を現すと、「おじさん！」と小吉が駆けてきた。

「小吉！」貞剛は飛び込んで来た小吉を両手でしっかりと抱きしめ

た。視線の先には、お光や父、母が疲れた顔ながら笑顔で立っていた。視線の先には、お光や父、母が疲れた顔ながら笑顔で立っていた。

「おじさん、山が怒ったんだ。僕には山の怒りが分かったんだ」

小吉は息を弾ませて叫んだ。

お光が近づいてきた。

「今回は小吉のお蔭で助かりました。山が怒っていると、ぐずぐずする私たちを引っ張って外に出ました。外は真っ暗で何も見えません。雨や風はうなりを上げて吹き荒れています。家にいた方が安全ではないかと思いましたが、『おじさんが山が怒っていると言った』と聞きません。それで小吉に引っ張られる形でなんとか手探りしながら病院まで逃げてきました。ここでは院長先生が古い包帯などを燃やし焚火たきびをしてくださっていたので、その灯を頼りにして歩きました。時には流れる土砂に足を取られそうになりましたが……」お光は涙を流す。「ようやく病院に辿りついた時、雷鳴が轟き、雷の光の中に私たちが住んでいた家がドドドドと土砂で流されるのが見えました……」お光は、その場に崩れた。小吉も声を上げて泣き出た。

「助かってよかった。家などまた建て直せばよい。とにかく助かってよかった」

貞剛は小吉を強く抱きしめた。小吉の父、母がお光の体を抱きか

かえるようにして支えている。二人は、何度も貞剛を見つめて、頭を下げていた。

*

九月十五日付けの海南新聞によると、豪雨による愛媛県下の死者は八百八人、そのうち「宇摩郡別子山うまの死者は総数五百八十四人にて内発見数四百六十七人なり。その内訳は左の如し。別子山にて発見二百四十一人、徳島県にて発見百八十六人、三島警察管内にて発見四十人、発見未済百十七人」と報道している。

別子銅山から遠く徳島県吉野川下流へ流された遺体が多かったのである。

正式な記録では別子銅山での死者は五百十三人となっているが、元禄開坑以来二百余年、かつてない大惨事となったのである。

九月十一日、十二日には真言宗・禅宗の僧侶百十人による法要が営まれた。

貞剛は住友として被災者に十分な見舞い金を支給した。また友純も自分の家計から二万円余りを被災者に提供した。そして別途、被害が甚大じんだいであった新居、宇摩両郡の被災者に多額の米穀など救援物資を提供した。

貞剛と鈴木はこのまま別子で精錬などを再開するのは不可能と考
え、採鉱課を除く精錬所などの施設を全て新居浜に移すことにした。
この時ほど貞剛は四阪島移転を決断したことに安堵したことはな
かった。

また貞剛は鈴木に、山の怒りを買ったのは、自然を破壊したから
だと言い、一層の植林を命じた。木々による山の保水力を高めない
と同じような被害がまた生じる可能性が高いからである。

鈴木はこの年は百四十五万本とかつてない規模の植林を行った。
その後も二百数十万本以上もの規模に拡大し続けたのだった。

海南新聞は九月七日付けで、別子銅山が他に比して圧倒的に死者
や被害が多かったことについて、如何いかに豪雨とはいえ平地ならばこ
れほどの被害にならなかつたと批判的な記事を掲載した。

別子銅山は、とても人家を建てることができなような急斜面を
階段状に切り拓き、人家を建設している。人家は斜面から張り出し、
土台は柱で支えている始末。これでは柱が倒れれば、次々と人家が
崩れるのは当然だと人災の面も強調した。

この指摘は正しい。見花谷りょうけんだにと両見谷の坑夫住宅が最も大きな被害
を受け、三百人余りの死者を出してしまったからである。

鈴木は坑夫や社員の住宅を再建するに当たって、貞剛に「雇人に
貸付する住宅の坪数の件」という上申書を提出した。

それまで貸家講という従業員らの互助会任せになっていた住宅を全て住友が管理し、建坪なども以前よりも格段に広くして、安全性はもとより衛生面にも配慮した住宅群に変えたのである。

小吉の両親のように稼ぎ人と言われた流れの坑夫であっても、それまでの六坪程度の住宅から十五坪程度の住宅に住めるように改善された。

貞剛は、別子銅山の再建を鈴木に託すと再び大阪に戻った。

小吉には、「一度と再び山の怒りを買わぬようにとの思いを込め「木を植えてくれよ」と強く言い、頼み込んだ。

小吉は、「はい。絶対に緑のお山にします」と強い口調で答えた。後に小吉は別子銅山の山林課に入り、植林事業に活躍する。

8

明治三十三年（一九〇〇年）一月、貞剛は総理事に就任する。そして次々と後の住友グループの基盤となる企業群を立ち上げ、事業の多角化に着手する。

住友銀行東京支店を開業し、住友の事業の東京進出を果たす。日本鑄鋼所ちゅうこうじょを買収し、住友鑄鋼場を開設する。これは後に住友金属工業（現在の日本製鉄）や住友電工、住友軽金属へと発展していく。

また別子銅山から山林課を独立させたが、これは住友林業に育っていく。また土木課は後に三井住友建設となり、さらに住友銀行の倉庫部門は住友倉庫となる。

まさに今日の住友グループの姿は、貞剛の総理事時代の賜物たまものなのである。

一方、別子銅山の第三通洞を完成させ、銅山経営の効率性を格段に向上させた。産銅を第三通洞を通じて東平とうなるに運び、ここで一旦貯蔵し、新居浜で精錬するというルートが確立したのである。

——そろそろだな。

貞剛は、書類に判を押しながら呟つぶやいた。下山を決意したのだ。後任に決めている鈴木もよく育った。まだ四十代で若く、多少粗削りのところがあるが、それは老人よりはずっとましだ。

貞剛は、雑誌「実業の日本」から依頼されて書いた原稿を取り出し、読み返し始めた。

そのタイトルは、「少壮と老成」とした。

その原稿は「白髪は敬しらがえと敬うやまえ」ということは、和漢洋共に昔から言い伝えてあるところを見ると、これは動かすべからざる定則であろう」という書き出しで始まる。

貞剛は、老人の価値は経験であるが、その経験に重きを置きすぎると、大きな間違いを起こすと書く。

「とにかく老人の癖として、何事につけても経験という刃物を振り回して少壯者を威し付け、何かな経験者の意見に服従せしめようとする傾があり、また少壯者は平生からこの刃物の恐るべく貴ぶべきを知っているから、大抵は経験者の命令に盲従する」と皮肉を込めて批判し、これは「大変な間違いである」と断ずる。

時代は、絶えず変化しており、昔の経験は、今には役に立たないからである。

そもそも経験は実体験であり、少壯者は、今からいろいろと経験していくのだから失敗は仕方がない。それを老人の言うことを聞かなかったから失敗したのだと批判するのはおかしい。むしろ「少壯者に貴ぶ所は敢為の気力である」と経験を振りかざす保守的な老人を叱る。そのため老人に従っていたら、少壯者は新しい事業もできず、経験も積めない。

「老人の保守と少壯の進取とはとかく相容れないもの」なのだ。そして「事業の進歩発達に最も害するものは、青年の過失ではなくて、老人の跋扈である」と喝破する。ただし返す刀で少壯者には成功を急ぐなど注意する。一代でできねば、二代でも三代でも懸けてやるくらいの決心が必要だと説く。

貞剛は、「これでいい」と原稿を読み終えると、自ら封をし、秘書に渡し、出版社に届けるようにと言った。

この原稿は、明治三十七年（一九〇四年）二月十五日発行の『実業の日本』に掲載された。

原稿の反響は大きかった。友純も「まさか引退をお考えではあるまいな」と気をもむ様子で聞いてきた。

貞剛はにこやかに、「もうそろそろ譲るべきかと思っております」と答えた。

「それは困る。なりません。伊庭殿はまだ五十八歳ではありませんか。老人ではありません」

友純は、動揺を隠しきれない。なにせ貞剛は、学習院の学生であった自分を住友に誘い入れた張本人である。

「ありがたいお言葉であります、やるべきことはやらせていただいたと思っております。これからは住友を離れて、近江の石山（現滋賀県大津市田辺町）に住まいを構えましたので、そこで妻や母と共に静かに暮らしたいと願っております。敢えて申し上げれば、不遜ながら出処進退の範の一つになればと考えております」

貞剛は、家長として立派に育った友純を慈しむように見つめた。友純は、貞剛の最後の一言で全て悟った。幸平の轍を踏まないように自戒しているのだ。加えて甥の身でありながら、恩人である叔父幸平に引導を渡す役目を果たしたことの責任を取る決意なのだ。

「幸平殿にもご決意を話されましたか」

友純は聞いた。

幸平は、須磨の別邸で隠棲いんせいしている。

「挨拶に参る所存です」

「なんとおっしゃるでしょうかね」

友純の問いかけに貞剛は、少しの間、考える風でいた。

「そうか……と一言だけではないでしょうか」

貞剛は微笑みながら言った。

「ははは」友純は笑い、「そうですね。幸平殿は英雄ですから、伊庭殿と会われただけで、その思いの深さを理解されることでしょうか」と言う。

貞剛は、七十七歳になったが未だに住友家を思う気持ちが衰えない幸平に思いを馳せた。

「残念なことが一つ、ございます」

貞剛は神妙な顔つきになった。

「それはどんなことでしょうか」

友純が聞く。

「盟友の峯山和尚と品川弥二郎を共に失ったことです。二人とは長年の友人で、引退すれば石山の別邸で語り明かそうと思っておりましたので……」

品川も峯山も、貞剛が総理事になったのを見届けるかのようにそ

れぞれ明治三十三年の二月、十月に他界したのである。

「それは残念なことですね」

「二人の遺影を石山に迎え入れ、それに朝夕、語りかけたいと思っております」

貞剛は、静かに手を合わせた。

明治三十七年七月六日、貞剛は総理事を退職し、活機園かつきえんと名付けた石山の別邸に住まいを移した。「活機」とは、世俗を離れながらも人情の機微に通じるといふ禅の心を表したものだ。貞剛の引退後の暮らしに相応しい。

翌明治三十八年（一九〇五年）一月、貞剛が心血を注いだ四阪島精錬所が本格稼働を開始した。しかし貞剛と塩野の計画に反して四阪島から立ち昇る亜硫酸ガスは、海に溶け込むことなく風に乗りに陸に渡り、煙害をより広範囲に拡大してしまった。

後任である鈴木はこの対策に苦慮したが、煙害を根本的に解決できたのは、昭和十四年（一九三九年）十月に亜硫酸ガスを中和する工場の完成まで待つ必要があった。この時の総理事は六代目の小倉正恆まさつねだった。

小倉は工場の完成に当たって、「煙害は賠償金で片づけるべきではなく、技術を以って解決すべきであると信じておりました。このこ

とは先輩の人々も同様に考えておられたことでありました。技術的になんとか解決の方法がないものかと苦心されました」と挨拶した。その時、小倉の目には、貞剛の姿が映っていたことだろう。小倉は、明治三十二年に住友に入社以来、貞剛の薫陶くんとうを受けてきたからである。

貞剛が言い残したように住友の歴代の総理事は、煙害の根本解決のために何代も懸けて辛抱強く努力し続けたのである。

貞剛は、活機園から自分の後継者たちの苦勞、努力を静かに見守り続けた。

*

大正三年（一九一四年）一月三十一日、幸平が須磨すまの別邸で亡くなった。八十七歳だった。

葬儀は二月二十一日、住友家家葬として執り行われた。参会者が千名近くになる盛大な葬儀となった。

貞剛は、遺影に向かい、手を合わせ、しばらく顔を上げなかった。

——あなたはまさに元龜げんき天正てんしょう以来の英雄でした。私はあなたの話になりながら、あなたに弓を引くことになりました。お許しください。しかしあなたが命を捧げられた住友の基盤を固める役割をい

ささかでも果たしたのではないかと思っておりますが、うぬぼれでしようか……。

貞剛が顔を上げると、遺影の宰平がわずかに笑った気がした。

——私もそれほど遠くない時期にそちらに向かいます。鮒ふなずしでも食べながら、じっくりと話しましょう。

大正七年（一九一八年）には母田鶴たづを見送り、そして、大正十四年（一九二五年）には最愛の妻、梅子を見送った。

梅子は、死を前にして、病のために延期していた金婚式を祝いたいと貞剛に頼んだ。

住友から贈られた金婚盃を使わずに死んでは申し訳ないと思ったのだろう。

貞剛は、梅子の願い通り金婚式を行った。その席で梅子は貞剛の酌を、二度もその金婚盃で受け、「目出たいことです」と喜びの表情を浮かべた。

貞剛は、梅子の手を取り、苦勞を掛けたと双眸そうぼうに涙を滲にじませて、詫わびた。

運命の非情さを感じたのは、大正十五年（一九二六年）に友純の急死に遭遇したことである。まさか、自分より先に亡くなるとは想像もしていなかった。享年きょうねん六十六だった。貞剛は、老体に鞭打むちち、嫡子あつし厚の後見人を務めざるを得なかった。

*

貞剛は寝台に体を横たえながら、庭を眺めていた。

死はすぐそばまで来ているという実感があつた。

家族にも、住友の関係者にも、感謝の気持ちを伝えた。こんなに安らかな気持ちで死を迎えられるほど目出たいことはない。

庭の木々は自由に育ち、あたかも別子のお山を偲しのばせる。折からの陽光に生の気を生き生きと発している。

木々が死に絶えた赤茶けた別子の山々も、今ではこの庭のように緑豊かになったことであろう。

意識が遠のいていく。

「おじさん、おじさん」

閉じかけたまぶた瞼を開ける。

庭に少年が立っている。

「小吉、小吉ではないか」

貞剛は、力を振り絞って笑みを作る。

「おじさん、お山へ登ろうよ。ほら」

小吉が手を前に差し出す。その手には、赤い実をたわわにつけた

小枝が握られていた。

「おお、アカモノが実ったのか」

それは別子銅山に繁茂する美しくも可憐な植物だ。

「おじさんと植えた木は立派に育っているよ。さあ、アカモノ摘みに今からお山に行こうよ」

「よし、よし、分かった……今すぐ……」

小吉の手からアカモノを受け取ろうと貞剛は手を伸ばした。しかしその手は力なく寝台の縁に落ちた。

貞剛は夢を見るような笑みをたたえたまま旅立った。

大正十五年（一九二六年）十月二十三日、午前七時、享年八十だった。

活機園の庭は、秋の光に満ち、さわやかな風が木々の葉を揺らしていた。

〈了〉